プロローグ

陽は翳り始めていた。

男はワイシャツの袖をずらし、腕時計を見た。それとほとんど同時に、背後にある小さな時計塔の鐘が鳴り始めた。庭園とは名ばかりのしょぼしょぼした植込みに囲まれた、二メートルほどの高さの時計である。

七月の太陽は、ステンレスの光沢のあるビルの谷間に、燃え立つようなオレンジ色の照り返しを投げかけながら、今日一日の軌道を描き終えて沈んでいく。周囲の雲は朱色に染まり、そこには天の溶鉱炉があるように見えた。

夏の永い一日が、ようやく暮れていく。

男は煙草に火をつけて、眼下の景色から目を離さずに、ゆっくりとふかした。煙草はそれが最後の一本だった。

ここからでは、街に満ちているはずの人間の姿が見えない。あまりにちっぽけな形をしているから、無数の建物、無数の道路、無数の窓のなかにまぎれこんでわからなくなってしまうのだ。

都市工学とかいうやつを研究する学者は、きっと人間嫌いであるに違いない。街を見ていれば人を見ないで済むからな――と、男は思った。

左手に遠く見える首都高速道の上を、車が列をなして走り抜けていく。どの車体も防護壁の上に出ている部分しか見えないので、まるでせっかちな射的場の標的のようだった。地上数十メートルの高さにある屋上庭園の片隅で、男はじっとそれを見つめた。

さあ、射ち落としてごらん。当たればでっかい景品があんたのものだよ。

指を焦がしそうなほど短くなった吸い殻を足元に捨て、かかとで踏みにじる。さあ、帰ろうと思った。

自分でも、なぜこんなに長いあいだ街を見おろしていたのか、わからなかった。覚悟を決めるためか。気持ちを落ち着けるためか。それとも、単なる習慣か。

彼は高いところを好んだ。そこから見おろす東京には、いつもなんの憂いもない。

そして、こうして風に吹かれ、青空を仰いでいるときだけは、もう二十年近く昔の暗い思い出が、わずかではあるが後退するのを感じる。閉じ込められ、逃げ場がなく、煙と炎に追われながら逃げた、あのときのことが。

落ちていく。一瞬だったはずなのに、記憶のなかではそれが何倍にも引き伸ばされて、延延と落ち続けている感じがする。そんな「発作」が起きると、男はいつもここのような高い

場所に立ち、もう落ちることはない、もう大丈夫だと、子供のまじないのように心に言い聞かせるのだった。

そうすると、心のうずきが止まる。足の古傷の痛みだけは消えないが、それはもうとっくに諦めていた。

顎をあげ、それから前に倒し、首の凝りをほぐす。リラックスしたほうがいいからな、と自分に言い聞かせる。なぜなら――

狩猟が始まる。

突然、その言葉が、心臓の辺りから響いてきた。彼は両足を肩幅に開いて立ったまま、夕暮の生ぬるい風に吹かれて佇んでいた。

背後のすぐ近くで、声が聞こえた。

「しんちゃん、そろそろ帰るわよ」

庭園の出入口の方から、ぽっちゃりとした中年の女性が近づいてくる。男のうしろを通りすぎて、時計塔の下へ歩いていく。そこのベンチに、小学校の高学年ぐらいの男の子が二人、座り込んで話に熱中していた。

「早くしないとパパ帰ってきちゃう。ほら、みっちゃんも。忘れ物しないでね」

二人の男の子は、おしゃべりをやめないまま、のろのろと立ち上がった。どちらかの母親なのであろう女性の方を、ちらりと見ることもしない。

重そうにふくらんだデパートの袋をさげた女性を先頭に、三人は男の立っている方へと戻

ってくる。疲れているのはおふくろさんだけだな、と男は思った。

女性がそばを通ったとき、ツンと汗の匂いがした。そして、盛んに身振りをまじえながら「しんちゃん」が「みっちゃん」に話しているのが聞こえた。

「それでさ、ここがコツなんだ。レベル７まで行ったら――」

どきりとした。ひょっとしたらびくんと飛び上がってしまったのかもしれない。通り過ぎようとしていた三人が振り返った。

女性と目があった。怪しんでいるというより、もう怯えている目付きだった。見てしまったことを後悔していた。いつどこでどんな災難に遭うかわからない都会では、デパートの屋上で一人ぶらぶらしている中年男などと、視線をあわせてはいけないのだ。

「失礼」と、男は言った。そしてフェンスの方へと顔を向けた。

動悸はおさまってきた。そのあと聞こえた会話の切れ端から察するに、「しんちゃん」と「みっちゃん」は、ロールプレイング・ゲームの話をしていたらしいとわかったからである。

男はため息をもらすと、フェンスから離れ、出入口の方へと向かった。あの三人も、もうエレベーターで降りてしまったことだろう。

彼が歩き始めると、入れ違いにフェンスの方へ行こうとしていた若い女性が、ちらちらとこちらを見た。彼をではなく、かすかにひきずるような動き方をする彼の右足を、である。

そういうことには慣れていた。その女性もすぐに彼から目をそらした。背伸びするように両手を上げながらフェンスに近づき、小さく歓声をあげる。

「わあ、きれい」

その声があまりにあけっぴろげで楽しそうな響きを帯びていたので、彼は思わず振り向いた。すると、彼女もこちらを見た。まるで、今の歓声は、わざと彼に聞かせるためのものだった、というように、素早くほほえむ。

「東京タワーのライティング、変わったのね」と、彼女は話しかけてきた。

美人だった。軽い小麦色に焼けた肌に、濃い口紅がよく映っている。こちらを向いたとき、耳元で金色のピアスが、夕陽をはじいてきらりと光った。

しかし、彼から見れば、子供と言ってもいい年ごろの娘だ。彼は黙って背を向け、わざとらしくない程度に足を速めながら、その場を離れた。

話しかけてきた娘は、彼を追ってはこなかった。せっかくモーションをかけてあげたのに、おじさん――というような顔で、ちょっと首をかしげているだけだ。

男は重いガラスのドアを押した。エレベーター・ホールの吹き抜けから風が吹きつけてきて、彼のネクタイをはためかせる。それでやっと、ピンが失くなっていることに気がついた。

ワイシャツの胸もとをなでてみる。ない。どこかで落としてしまったのだろう。

さして惜しいものではなかった。もらいものだが、心のこもったプレゼントではない。彼はエレベーターのボタンを押し、箱が来ると乗りこんだ。独りきりだった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。